

母との約束

人は誰しも、言葉ではうまく表せないもやもやとした悩みを一つや二つ抱えているだろう。

私もそうだ。でも、ただ一人、何を言うわけでもないが私の思いが伝わる人がいる。母だ。いいことも、わるいことも私の気持ちは母には筒抜けだ。

何とも不思議だ。でも、私はそのおかげでいつも助けられている。

以前、習い事にどうしても行きたくない日があった。

用事があるわけでもないし、嫌いな人がそこにいるわけでもなかった。

ただ、私の気が向かなかった。もちろん、父には習い事に行くように言われた。

当たり前だ。しかし、車で私を送ろうとしていた母はそんな私に気がついて、

「行きたくないなら行かなければいいじゃん。」そう声をかけた。

私は一瞬、怒られたのかと思った。でも違った。

母は道を折り返しどこかへ向かおうとしていた。

どこに行くのかと尋ねると、近くにある滝へ向かっているのだと答えた。

私は思い出した。

その滝は家族で何度も行っている滝で、

中学生になってからはまだ一度も行っていない懐かしい場所だった。

その滝は田舎の山の中にあつて、そこまで規模も大きいわけではない、

知る人ぞ知る穴場のような場所だ。

駐車場について母と二人で遊歩道を歩いた。

真夏の暑い日でも、森の中に入るとこんなにも涼しいのかと感動した。

葉っぱの隙間から覗く太陽はまぶしくもあり、あたたかく包み込んでくれるようだった。

十分ほど歩いて、滝に着いた。誰もいないその滝は透き通るきれいな湧き水と、

それを取り囲む青々とした木々たち、見上げると雲一つない青空、まるで絵画のような風景だった。

私は、川の中心から少し離れた流れの穏やかな場所の岩に移動して、靴下を脱いだ足を冷たい水の中へと入れた。

私の中のもやもやが、一気に体の外へと流れていくようだった。

母は、私を写真にとっていた。母を呼んでその写真を見ると、紺色の服を着ていた私は木々の影に紛れて、自然と一体化していた。

「ウォーターリーを探せ」みたいだねと母と顔を合わせて笑った。

目の前に広がる雄大な自然。滝から流れ落ちる水の音。無心でいると、私のすべてを受け入れて包み込んでくれるようだった。

何もかもを忘れて、私は水の中に入れた足で、水をばちやばちやと音を立てて楽しんだ。

一時間近くたっただろうか。母は私にそろそろ帰ろうと声をかけ、私は母から受け取ったハンカチで足を拭いて靴を履いた。

冷たい水につかっていた足はまだ冷えていて靴の中に入れるとあたたかく感じた。その感覚が不思議と心地よかった。

これからも、また悩むようなことがあつたらもう一度ここに母と来よう。

車に乗った時に心に決めた。この滝は私と母との秘密の場所だ。

母には照れくさくて言えなかったけれど。

でも、母は分かっているようだった。母は私の顔を見てにんまりと笑った。

それを見た私にもにんまりと笑った。



北杜市立甲陵中学校 三年

今井美杷

絵

西のぼる